

さくらみち 〈河畔倶楽部〉

法勝寺篇

絵：野口宣友

ました。発案者は女性の堤つね子さんで、『河畔倶楽部』と言う“会称”を提案。藤原政義さんを初代会長に選任して、ここに十人足らずで『河畔倶楽部』の誕生をみました。



県内外、屈指の「桜の名所」となった「南部町の桜」は年々多くの花見客を呼ぶ事になりました。こうした満開のさくらを全国発信できるま

でになった陰には、ひたむきに桜を育て、桜を愛し桜を知る「河畔倶楽部」のたゆまぬ「努力」があったからです。

法勝寺城（別名：尾崎城）といわれた毛利居城の跡に村民のいこいの場にふさわしい公園をつくり城山一帯に「桜を植えて“公園をつくらう”。河畔倶楽部が発足してから4カ月

たったお盆すぎの定例会で声があがった。昭和27年（1952年）早速城山一帯の現地調査を重ねたがとても公園になる土地ではなかった。翌年、正月のお屠蘇気分も覚めない寒風の

吹く昭和28年1月5日、会員は手弁当持参で第一斧（おの）を入れた。山道普請・竹根の掘り起こし・草刈・清掃など。当時、道のない中を資材を1つ1つ担ぎあげ、歯をくしばって

頑張った。奉仕が重なるにつれて本丸二の丸が美しい姿をあらわし、こうして整地の終わったところから桜の苗木を20本植えたのが始まりであった。その後、城山に桜を植えながら眼下を見下ろすと必然的に法勝寺川土手にも植えようと言う話に

誰かれとなく出た。当時、村の人々から『おまえたちは気違いじゃねだか。』山に桜を植えて育つと思っちゃったか。』とののしられたが、会員の団結心は固く、努力と根性の長い道のりが始まった。それから、倶楽部会員一同の奉仕は限りなく続き『桜並木を川土手に』の熱い思いは建設省に許可を得る為会員の日参も続いた。近年には、島根県木次（きすき）

町の桜守である川淵（かわぶち）氏を招いて手入れの実施指導も受けました。毎月の定例会は各会員の家で行われ、玄関には「河畔倶楽部」の提灯に灯が入り、それを目印に会員

が三々五々集まってきました。少しでも社会に奉仕の出来る事に喜びを感じ、地域の活性発展・親睦を深めながらの話は尽きませんでした。そうした結果、満開の夜桜の時期にはぼんぼりの下で「桜まつり」が催され、その楽しい宴（うたげ）に城山は湧きました。

完